て候、

〔倭訓栞中編二十五〕みゝなぐさ　七種菜にいへり、卷耳なり、俗にみゝなしとも、猫のみゝともいふなり、

〔古今要覽稿菜蔬〕みゝなぐさ　れづみのみゝ　卷耳

みゝなぐさ一名みゝなし、一名ねづみのみゝ、一名ねこのみゝ、一名ほとけのみゝは漢名を卷耳、一名苓耳、一名苓、一名蒡、一名獾耳菜といふ、此草はいづれの國にても、河邊の堤、あるはこだかき山ぎしの、日あたりよき所に、冬のうちより地にしきて、むらがり生出て、その大なるものといへども、わづかに一尺には過ざるなり、莖ははこべらに似て、うす紫の色を帶び、それにつく葉は、ふたつづゝ相並びて、かはらけ菜に似て、少し狹くして長し、その色はこきみどりにて、莖にも葉にもうす白き毛あり、彌生の頃に至りて、そのくきのするに、いさゝかなる枝をわかちて、いと小さき五ひらの白き花さきて、後に一分ばかりのあをき實を結び、そのなかにこまかなる子あり、扨此みゝなぐさは、もとより古の七くさのうちの、一くさにあらざるよしは、清少納言の見もしらぬ草を、子供のもて來るをといはれしにて明らけし、然るを壒囊抄に載し、あしな耳なしまたすずなみゝなしとよみし二首の歌につきて、世の人彼是のうたがひをもおこしぬる事なれども、此歌は清少納言よりはるかに後の人の、かの草子にきくもまじれりと、けうせし歌などあるによりて、たはむれに此草をも、七種のうちによみ入しものなれば、それにかゝはりて、古の七くさをあげつらふは、片腹いたきひが事なり、

〔枕草子七〕七日のわかなを、人の六日にもてさはぎとりちらしなどするに、見も去らぬ草を、子どものもてきたるを、何とかこれをばいふといへど、とみにもいはず、いざなどこれかれ見あはせて、みゝな草となんいふといふものゝあれば、むべなりけり、きかぬがほなるはなど笑ふに、又お